

Othello小論—作為された cause の悲劇—

春原正彦

Othello を描いた絵画や挿絵といえは伝統的に終幕の寢室の場が多いようだ¹、この劇の解釈の鍵を握るとしてよく言及される行句の一つは、同じ寢室の場に Othello が登場しながら口にする、いわゆる 'It is the cause' speech である。このくだりについては、当然あまたの分析がなされているが、このせりふに限らず、'cause' という語は、この作品全体のキーワードの一つであると考え、その悲劇性がより良く理解できると思われる。さらに言えばこの言葉はシェイクスピア悲劇全体の鍵語でもあると思われるのだが、別の機会に *King Lear* における cause については論じたことがある²。*Othello* についても考えてみようというのが本稿の目的である。

1

まず、cause の意味を調べておきたいが、当時の語義と今日との差はあまりないようである。*OED* によれば、第1義はやはり「因果(関係)」「cause and effect」という場合の語義になっており、自然現象的な意味での「原因」といえる。広義ではこれに包含されようが、一応人事に関わることとして区別すれば、第2義は、'that which moves a person to action; reason, motive' (*OED*, I. 2) となる。人間の行動の「動機」、「原因」、「いわれ」、「理由」であり、例えば Iago の妻 Emilia が 'They are not ever jealous for the cause' (3.4.154)³ と言ったり、同じく彼女が夫に悪口を言われて 'You've little cause to say so.' (2.1.107) と抗弁する場合の cause はこれにあたる。第3の語義は、'the object of action;

purpose, end' (*OED*) で、例えば 'to fight for a good/worthless cause' という風を用いる場合にあたる。この場合、因果をいわば逆転させて、将来見込まれる結果をもって因となすと考えられ、日本語で言えば「大義」「名分」「目的」というほどの意味になる。これはアリストテレスのいう「目的因」、「究極因」(英語でいう final cause)⁴ に相当する。第4の語義は法のおよびその比喩的な意味での「(原告および被告それぞれの) 言い分」、もしくは「(訴追されるべき) 嫌疑(case)、関連して第5の語義として「訴訟」「争い事」(a matter of litigation) がある。これはもう少し軽い感じの第6義として「問題」「(この) こと」「(あの) 一件」(a matter [of concern], question, affair) といった意味になる。Alexander Schmidt は、Iago がいわゆる「誘引の場」で 'But sith I am entered in this cause so far' (3.3.412) と口突めかして言うのをこの第6義に相当する例として挙げている⁵。

いずれにせよ、基本的には「因果」に関わることが分かる。例えば甲が乙を殴って負傷させた場合、乙が負傷した原因は甲による暴力だといえ、これは自然現象的な事象と同じ意味での「原因」である。しかしその人間的な内面を見ていくと、甲には乙を殴る「いわれ」があった、いやない、ということになるかもしれない。あるいは、甲が乙を殴ったのは恨みや怒りではなく、乙を思えばこそその「愛のむち」であるとか、この二人の属する集団の和や綱紀のため、とかといった「大義名分」が持ち出されるかも知れない。あるいは、裁判官になって、双方の「言い分」が対立するかもし

れない。原因もしくは因果とはいいいながら、それが人間に関わるものである限り、そこには主観や判断が介在し、必ずしも客観性や絶対性があるわけではない。そのために cause の意味も多義性を帯びてくるのであろう。言い換えれば、それだけこの語が認識論的な意味の諸相を内包していることになる。そのことが *Othello* という作品においてはどのような演劇的意味を持っているか、以下主な人物について順に考えながら考察を進めたい。

2

Iago 論は例の 'the motive-hunting of motiveless malignity' というコールリッジの評言が常に焦点となってきた感があるが、「動機」に関する限り、今日では、「無動機」ではなく、Iago の言っていることをむしろ素直にとって複合的な動機と考える解釈が一般的であろう。すなわち、自分は旗手に留め置かれ、副官 (lieutenant) に Cassio が登用されたことで Othello を恨み、Cassio を嫉視している。かつまた Othello や Cassio が自分の妻 Emilia と通じたと疑っており、仕返しせずにはおくまいとも考えている。また粉本とされる Cinthio の物語ほど明瞭ではないのだが、Desdemona に横恋慕する気持ちがあるので、その意味からも Othello が憎いというわけである⁵。こうしてみると、Iago のいわゆる「動機」なるものは、上でみた 'cause' の第2義に相当するので、cause と言い換えても差し支えなさそうである。事実 Iago は Othello に対する恨みの深いことを cause という語を使って、例えば 'My cause is hearted: thine hath no less reason.' (1.3.350-351) と Roderigo に話す。

Iago の 'cause' 論の特徴は、自分の挙げる cause が事由として疑問の余地のない、確固たる客観的な事実であると最初は思っていない点にある。例えば1幕3場の独白で、妻と Othello が通じたといううわさがあって、本当かどうかわか

らないが、

Yet I, for mere suspicion in that kind,
Will do as if for surety. (ll. 371-372)

と言う。そして2幕1場になると、この疑いに対する確信の度合いが強くなって、

For that I do suspect the lusty Moor
Hath leaped into my seat, the thought
whereof
Doth like a poisonous mineral gnaw my
inwards;
And nothing can or shall content my soul
Till I am evened with him, wife for wife;
(ll. 276-280)

と憎しみを募らせる。そしてさらに続けて、この復讐に巻き込んでやるといっていた Cassio について、奴もおれのナイトキャップをかぶったらしい (For I fear Cassio with my night-cap too—) (288行) と言い出す。ここで急に Cassio も自分の妻と怪しいからと理由づけするのは、いかにも取ってつけたようで、悪魔的な「無動機」説にも一理あるという気がしてくる。しかし、やはり Iago に動機が無いのではなく、最初はそれが漠然としているというにすぎず、その動機を我々の前で漸次分節化・形象化してみせるというべきであろう。5幕1場でいよいよ Cassio を襲わせて殺そうという段になって今度は

He hath a daily beauty in his life
That makes me ugly; (ll. 19-20)

と、そもそも Cassio が自分にとっては引け目を感じさせる存在であることを吐露し、Cassio を殺さなければならぬ動機を補強する。

彼は策謀の目鼻をつけていくことについて

In speaking for myself. (1. 3. 88-89)

'Tis here, but yet confused ;
Knavery's plain face is never seen
till used. (2. 1. 292-293)

とうそぶきながらこの場を締めくくるのだが、己の cause をいわば小出しに分けて口にして、自分に言い聞かせるようにして強固なものにしていく。Iago は誘引の場面で、言うなれば偽善的に偽悪者ぶって、自分には人の過ちをせん索する悪い癖があって 'oft my jealousy / Shapes faults that are not' (3. 3. 148-149; イタリアック体は筆者) と言うのだが、Iago の cause はまさに 'shaped' causes 的な色合いが濃く、奸策と平行して理由の方も 'improvise' していくという印象を作者は与えているのである。

Othello より先に、Iago によいように操られている Roderigo の場合、Desdemona に対する思いを遂げるには自分で手を下して Cassio を殺さなくてはならぬと Iago から言われ、その理由 'a necessity' (4. 2. 231), 'satisfying reasons' (5. 1. 9) なるものを、言い含められたことになっている。Iago がどう説得したかは我々に示されていないのだが、少なくとも cause はそこでも作られたことは確かだ。

3

幕開きの場面で、Othello に復讐すべく Iago は、Roderigo と一緒に Desdemona の父親 Brabantio のもとに行き、娘の駆け落ちを知らせる。ろうばいした Brabantio は、折しもトルコ艦隊来襲問題で非常招集がなされた元老院へ 'Mine's not an idle cause.' (1. 2. 95) と言ってこの私事を訴えに駆けつける。そしてそこで Othello が娘を魔術でたぶらかしたに相違ないと訴える。釈明を求められた Othello は

... little shall I grace my cause

と前置きしてあの印象的な弁明を行う。ここでは二人の 'my cause' が相対決する形になる。結局 Brabantio の言い立ての方が不当であったことになり、いわば 'lost cause' となってしまう。そして Othello の方は己の恋に関わる cause を揺るぎないものにしたことになる。別れ際に Brabantio が、父親を歎したくらいの女だからお前も気をつけるがよい、と一種の因果論を述べると Othello は 'My life upon her faith!' (1. 3. 290) と応じる。妻の誠には命を懸けても、との所念は、必然性のある因果律を述べたというよりも、それが Othello の新たな cause, 目的因としての cause になったことを示すものと解されよう。

しかし、あくまで妻を信ずるということを経ずに Iago の中傷を信じてしまったという意味では Othello の決意は守られなかった。そのことが Othello の 'tragic error' だとする批評家もいる⁷。愛死 (*Liebestod*) の物語の典型からすれば、恋する者同士の相寄る魂は一つの魂と化して、これを損ねようとする外なる力に対して抗おうとする。しかし、この悲劇では、一つになった魂は、キプロスの波止場で再会した時の歓喜を絶頂として破綻し、Othello の魂は Iago のそれに吸い寄せられ、これと一つになるかのようだ。

いわゆる 'the temptation scene', 「誘引の場」で、Iago から妻が不義を働いているとほめかされた Othello は

Nor from mine own weak merits will I
draw
The smallest fear or doubt of her revolt,
For she had eyes and chose me. No, Iago,
I'll see before I doubt; when I doubt, prove;
And on the proof, there is no more but
this :

Away at once with love or jealousy!
(3. 3. 189-194)

と明快な因果律による愛情観を述べて自信のほどを披歴するが、いったん Iago を下がらせた時には妻の不貞を信じ始めて、

．．．．．If I do prove her a haggard,
．．．．．
I'd whistle her off and let her down the
wind
To prey at fortune. (3. 3. 262-265).

と弱気になり、「おれは欺かれた。おれの救いはあれをいとうことでしかない」(3. 3. 269-270) という悲観的な因果論を述べる。やはり証拠を見せる、ということになるが、Iago は、cause の用例として最初に挙げた「この件にここまで深入りしてしまっただのですから」という口実を前置きに、Cassio の寝言と称するものや、折よく手に入れたハンカチのことに言及して Desdemona の不実を Othello に確信させ、二人は復讐の誓いをするに至る。

Desdemona の貞節に命を懸けるということが Othello の cause であったはずだが、彼女の操がそれに値しない忌まわしいものであると信じた時に、今度は逆にこの汚辱を抹殺することが Othello の cause となったのである。しかし、Othello にとって、Desdemona の貞心に死を賭すことよりは、Desdemona を処断することの方が、成り行きからしてもはるかに難しい。Desdemona がハンカチを持っていないことを確かめ、「盗み聞き」の場面で、もはや疑いの余地がないと思いついた Othello は Iago とあだ討ちの手はずを決めるのだが、そのやりとりは注目に値する。

OTHELLO Get me some poison, Iago, this

night. I'll not expostulate with her,
lest her body and beauty unprovide my
mind again—this night, Iago.

IAGO Do it not with poison; strangle her
in her bed, even the bed she hath con-
taminated.

OTHELLO Good, good! The justice of it
pleases; very good!

IAGO And for Cassio, let me be his un-
dertaker. You shall hear more by
midnight.

OTHELLO Excellent good!

(4. 1. 192-200)

'good' が繰り返されるのは、Othello が自問を繰り返返し、半ば反射的に答えていることを示す。というより自分に言い聞かせていることを示すというべきだろう。すなわち、Iago が同様にして行動の確信を固めてきたように、Othello も自分に cause もしくは 'justice' を言い聞かせて、Desdemona の美しさが決心を鈍らせるかもしれぬが、と自分の心を励ます様を見取るべきであろう。

「励ます」'to cheer himself up' という言葉はエリオットが用いて有名になったが、彼は絶望的な状況にある人間が、欺まんな自己劇化によって自分を悲壮な人間に見せようと、気を引き立てる、というような意味で用いており、特に幕切れの自己弁明を指して言っている⁸。しかしこの言葉は、それ以前に、このように Othello が Desdemona 断罪の決意を固めようとしてためらう気持ちに対し、これを「励ます」、「元気づける」という風に用いてもよいと思われる。そうした態度は、すでに「誘引の場」でもうかがえる。

Now do I see 'tis true. Look here, Iago,
All my fond love thus do I blow to heav-
en;

'Tis gone.

Arise, black vengeance, from thy hollow
cell!
Yield up, O love, thy crown and hearted
throne
To tyrannous hate! Swell, bosom, with thy
fraught,
For 'tis of aspics' tongues.

(3. 3. 445-451)

この行句から有名な「ポンティックの海の冷たい流れ」云々と続く誓いにせよ、あの、総ての栄光は過去のものになってしまったと叫ぶ 'farewell speech' しても、Desdemona の不義は決して許せないとの感懐を劇的に表出しているというだけでなく、そう言明することによって（もしくは Iago にそう言わされて）、心を奮い立たせ、憎悪を燃やすように自らの胸に命じているかに見える。そうした意識が看取されてしかるべきであろう。その点では、Desdemona に向かって 'Handkerchief' と何度も絶叫するのも、絶望を表すと同時に、信じたくない事実をやはり事実なのだと思える。自らの心に必死にたたきこんでいるように思える。

4

前場の前半でも血の復讐を誓い、「淫売め、行くぞ」(5. 1. 34) と言って退場した Othello ではあったが、終幕の場に登場してくる時はやや様子が変わっている。(批評家たちは副詞を添えた 'calm' という表現で、例えば 'strangely calm' という風にそれを言い表すことが多い⁹⁾ 作者の作劇上のストラテジーとして前半のヒロイックな Othello, その後の 'Othello Furens'¹⁰ ともいふべき狂乱の Othello との間に一種の止揚がなされ、第3の Othello 像が提示されているとみなすべきであろう¹¹。それは冒頭でも触れた cause 論で始まる。

It is the cause, it is the cause, my soul:

Let me not name it to you, you chaste
stars.
It is the cause. Yet I'll not shed her
blood,
Nor scar that whiter skin of hers than
snow
And smooth as monumental alabaster—
Yet she must die, else she'll betray more
men. (5. 1. 1-6)

出だしの3行の部分の意味が曖昧であるために、注釈者たちが様々な説明を試みている。Variorum 版の編者によって 'perplexity'¹² とみなされている曖昧性を 'ambiguity' として肯定的にとらえ始めたのは、やはり William Empson の功績だろうが、Winifred M. T. Nowotny はさらに積極的な解釈をして、我々が見た語義を4語義にまとめ、ここでは「大義」を含めすべてが含意されており、Othello が己の行為にこめた複雑な思いをよく表出していると言¹³。また John Money も俳優としての立場から分析を試み、やはりこの cause が多義的であり、It=my soul と取る構文も第2義的に感取できて曖昧であり、'no cause' だと知る我々にとって、アイロニカル、かつ「欺まんの」(deceptive) だという¹⁴。

いずれにせよ、上の3行に始まるモノローグについて二つのことが言えるように思われる。その一つは、リフレインされる 'It is the cause' は豊かに曖昧であるが、この後も続く独白全体としては、天誅を加えなくてはならぬと、主に目的因について Othello が考えているように感じられることである。もう一つは、上のリフレインのみならず、'Yet' も繰り返されていることによって Othello がここでも自分に言い聞かせ、納得させるように独白していることが感じ取れるということである。後の点について Empson は、文意に見合った文体で次のように巧みに説明している。

・・・当面の問題は彼が彼女を殺すかどうかであるが、この点では決断はすでになされている。それを当然のこととして受け容れ、せりふの上にもそれが影を落としているわけだが、それを彼は信じようと努力している、彼女に対する感情をそれと一致するように整えようと努力している、自分の心の中でそれを耐えられそうなものにしようと努力しているのである¹⁵。

おのが cause を考え、それを自分に納得させている Othello の言葉を聞くとき、我々はまたしても、cause が作り上げられると感ずる。そもそも Desdemona が無実である事を観客は知っているから、偽りの cause だと感ずるのは当然である。しかし、それだけではなさそうである。それは、このいわば cause 論そのものに関わってくるように思われる。このスピーチが主人公の気高さの回復や器量の大きさを示すものか、それとも欺まんな的な自己正当化や自己劇化に過ぎないのかという点では、周知の通り解釈は大きく分かれているが、それとも関連させて考えてみたい。

まずここで Othello が展開する論理について吟味しておくべき意見がある。それは、ここでの論理づけは、Othello が Iago に影響されて出てきた Iago 的な論理だというものである。R. S. White は、Othello は本来「偶然性」(coincidence) を信じていたが、Iago 的に因果律によって行動し始めたのだとし、「'cause' は Iago から学んだ語である」という¹⁶。また John Bayley も、Othello の cause 論は Iago 流に自分の立場を 'rationalize' するもので、とりわけ、「やはり死なねばならぬ。さもなければまた男を裏切るであろう」と Othello が独りごつのをもし Iago が聞いたら、Othello を完全に自分の論理に引き込んだことを知って無上の喜びを感ずるだろう、なぜならそれは、人は lust を love と言ひ、'jealous fury' を 'justice' と考えるのだという Iago の信念を裏書してくれるからだ、と述べる¹⁷。どち

らの論者とも、論理だけについて考えていて、決して Iago 的イメージの人間になっているとは言っていないのだが、それにしても首肯しがたい。

Othello はいつとも分かぬ戦い、冒険の明け暮れのうちに過ごしてきたし、Desdemona との恋にもぎょう幸のようなものを感じたとしても不思議はなかるうが、Othello が生を偶然の連続と考え、因果律は Iago から初めて学ぶというような見方は二分法が災いしていよう。また、Iago が因果律によって理詰めでものを考えているのは事実だとしても、その因果論は Othello の展開するそれとは少しく違うのではないか。例えば、lust が先にあってそれを love と我々が呼んでいるのが、仮に事実だとしても、普通我々はそのために論理づけしたり、意志の力を必要としたりしない。Iago のような reductive な説明もすぐ理解することができる。「恋は長椅子の上の出来事にすぎない」というような現実主義的な恋愛観は、ロマンチックな恋愛観のアンチテーゼとしていつの世にも存在したからだ。Iago が人は lust を love と呼んでいるのだと考えていることは確かである。Roderigo を欺くときには、愛情なんぞでなく、どうせ欲情のせいゆえ、Desdemona もじきに Othello に飽きるとたぶらかし、Othello に対しては、二人はあなたの目を欺いて、欲望を満たしていると憎悪を燃え上がらせる。しかし、人は嫉妬に満ちた復讐を正義と呼ぶかと、Othello が正当化の論理に腐心するだろうというようなことは、Iago によっては表白されていない。Desdemona の所業が 'foul' (4.1.189) だとは言いが、復讐は正義のためにも必要というような入れ知恵はしていない。誘引の場面で最後に復讐の誓いをする際にも、述べていることは、辱められた Othello のためにどんな血生臭いことでもする、ということであって、復讐以上のものではない。

Iago の因果律というのはいよいよ、Othello たちが憎いから彼らを陥れる、あるいは Desdemona

は不自然な情欲から Othello と結婚し、Cassio とけしからぬ不義を犯したと偽る次元にとどまっている。つまり、上でみた第1義および第2義における原因・結果論の域を出ていないのである。また、そそのかしの意図から出た言葉とはいえ「別にあなたにさえ障りがないのなら、だれにも関わりないのですから」(4.1.187) という発想であり、やはり個人の次元に局限されたものとして描かれているように思われる。

これに対し、Othello の頭の中では、McElroy の言うように、Desdemona との関係に関する私的な cause と、天下・自然の普遍的な cause との間には区別がなくなっている¹⁸。また Othello が思い回らしているのは、むしろ目的因としての cause 論であり、これは Iago に吹き込まれたものではない。自分の行為は正義であるはずだが、それはなぜか、その論理と意味を考えている。Goldman の言葉を借りれば 'the cause of his cause'¹⁹を探っているのである。「すべての実在は、『意味付与』によって存在する」²⁰という現象学的認識論とのアナロジーで言えば、Othello の想像力と思念によって Desdemona の持つ生命の美しさ尊さと、これをあやめるべき「正義」の論理が現前される。Graham Bradshaw によれば 'human need to endow life with significance'²¹を示す行為である。

Othello の cause 論は Iago のそれより次元の高いものであることを見たとおりである。が、しかし、やはりそれは、言うなれば 'shaped' causes あるいは 'laboured' causes という印象を我々に与えずにはおかない。それはなぜなのだろうか。

妻の密通に対して当事者を殺害することは正当化できるのであろうか。このことが問題になってくるように思われる。完全にだまされているというものを除外して考えた場合、Othello が間男されたと信じている以上、これに対して私的制裁を加えようとするいわれは当然であると、彼の立場に

立って我々は認めるべきであらうか。

いわゆる女敵討ちそれ自体は、洋の東西を問わず、社会通念としてかなり容認されてきた経緯がある。まして所は悪名高きヴェニス、命より大事とされたという名誉のためにも、男らしさをもつてなる軍人が間男されたという屈辱をはらすためにも、相姦者を成敗しても良い、いやむしろしなくてはならぬ 'cause' があると当事の観客は見なしていたともいわれる²²。その場合、報復の形は様々である。材源とされる Cinthio の物語の主人公のように、文字通り復讐心から妻を殺し、その犯行の隠ぺい工作をする、という場合もある。The Winter's Tale の Leontes の場合、国王に対する大逆罪という因果律をもって妻を公的に罰した。また The Maid's Tragedy の夫 Amintor のように、行動に出ればかえって恥辱を世間に知らせるようなのだと考えたり、女敵が国王でもあるしというのであきらめようとするような場合もある。

Othello の場合は、Desdemona を成敗することの正当性について考え、それを自分に納得させつつ決行に及ぶのである。自分の行為について考え続ける。

But they are cruel tears : this sorrow's
heavenly——

It strikes where it doth love. (ll. 21-22)

目を覚ました Desdemona にも、自分がどういう意識を持って事に及んだのかをわからせようとおがく。

Thou dost stone my heart,
And mak'st me call what I intend to do
A murder, which I thought a sacrifice.
(ll. 63-65)

密通の断罪が容認されているという前提に立て

ば、こうした Othello の正当化が特に拙劣で自己中心的であるとはいえないだろう。もっと良い論理づけが可能とも思われぬ。それでも何やらうさんくさいものが感じられるとするならば、それは、そもそも密通のあだ討ちという大義名分そのものが怪しいということではないのだろうか。シェイクスピアが不義のあだ討ちについてどう扱っているか見てみると、妻に密通されたり、されたと邪推、もしくは欺かれて信じる例がいくつかあるが、Othello のように断罪することの正義について改めて考えてみたりする人物はいない。すでに触れた Leontes の場合も、姦通のほかにも国王である自分の命をねらったとして公的な処刑を当然の「正義」としているのであって、私的な制裁の正当化が開陳されているわけではない。Titus Andronicus に登場する皇帝 Saturninus、あるいは King Lear の Albany 公（姦通未遂かもしれないが）などの場合、たまたま姦婦たちが他人の手にかかって死ぬので、事実上自分では何かをする機会さえ与えられていない。また Cymbeline の Posthumus はやはり奸計にあって妻が不貞をしたと信じこむや、妻や女をのろい憎み、復讐として召使に殺害を命ずる。しかし、復讐の際に証拠と偽って召使が送ってきた血染めのハンカチを見ると、こういうことで妻を殺していたのでは、世の中の人妻は皆殺されなければならないだろうし、召使も命令だからとて、義にかなった (just) 命令のみ聞けばよいのに、と逆恨みさえして、嘆き (5 幕 1 場)、むしろ、こうしたあだ討ちの正当性を批判しているようにみえる。不倫の不当性は殺人の不当性を上回ると思わなかったとしても²³、こうした私的な復讐を完全に正当化することは難しかろう。Othello による正当化の試みが我々にしっくりしないとすれば、それは、密通者の制裁の正当化というものが、本来危うい論理に基づくものであって、吟味によく耐えるものではない、とシェイクスピア自身も感じていたからではあるまいか。つまり Othello の欺まん

性といわれるものは、最終的には相姦者成敗の論理そのものの欺まん性に起因するものではないだろうか。「最終的には」と言ったのは、Othello の欺まん性を感じさせてしまうことについては、シェイクスピアの側の不手際に帰すべき点もあると思うからである。具体的には、Othello が眠っている Desdemona に接ふんするが、これは Norman Sanders の言葉を借りれば「彼女の罪について頭の中で確信していることにそぐわない本能的な性的反応」²⁴ と感じられて、その cause 論に欺まんな印象を与える大きな要因になっていると筆者は考える²⁵。しかし基本的にはやはり、たとえ単に怒りと憎しみにまかせて復讐をするのではないとしても、女敵討ちという、本来、論拠薄弱な cause 論に依拠せざるを得なくなるところに、Othello の悲劇性があると考えられる。加えて、それが全くの事実誤認に基づいていることを我々が知っているために、二重の意味で作為された cause であるとの印象を持つのである。我々は、生に意義あらしめようとする人間の行為、本来善であるはずの目的因といえども、いかに危ういものでありうるかを目撃する、というより、させられる感がある。

5

Desdemona においても、cause という語やそれが表わす概念は重要である。Othello の勘気に触れ、執り成しを頼む Cassio に対して Desdemona は 'Thy solicitor shall rather die/ Than give thy cause away.' (3.3.27-28) と尽力を誓う。この cause は我々の語義の分類からすると第5もしくは6義に相当して、「(代理人として受けた依頼の) 件」というほどの意味であるだろうが、それに命を懸けるという(事実そうだったといえる)。そしてハンカチを見せろと狂ったようにわめくの見た Emilia が、嫉妬のせいではなければ良いのですが、と言うと 'Alas the day, I never gave him cause.' (3.4.152) と応ずる。

Desdemona はその恋において決して消極的ではなく、むしろ積極的である。元老院での駆け落ちについての申し開きにせよ、キプロスに同行することを所望することにせよ、いわばこの恋をおのが cause としたその cause 論は、揺るぎない自信に満ちたものである。また、夫の言いなりになって、Ophelia のごとく従順なだけの女性には描かれていない。Othello がハンカチを見せろというのに抗して Cassio の件の再考を迫り、その処置の仕方について批判しているとも取れる、'I'faith, you are to blame.' (3.4.92) という言い方もする。また Othello に初めて 'strumpet' と面罵された時は 'By heaven, you do me wrong.' (4.2.80) と抗議もしている。

自分の恋や Cassio の依頼という cause に命を懸けるということは、彼女にとって Othello に懸けるということと同義なのであるが、狂った Othello のアイデンティティを彼女が見失った時、Desdemona が cause に対して取る態度は、Othello とは対照的である。Othello を「弾劾」した自分の心根がいけない、'And he's indicted falsely.' (3.4.148) と訴訟の比喻を連ねつつ自罰反応を示す。あるいは 'brothel scene' で娼婦扱いされた時は、先程のように抗弁はするが、その後では "Tis meet I should be used so, very meet!" (4.2.106), 自分は何をしたんだろうか、と自嘲気味に当惑はしても、Othello を責めることはしない。人前で Othello に殴打された時こそ 'I have not deserved this.' (4.1.231) と抗弁はするものの、あの死に臨んでのうそに至るまで、夫を信じ、文字通り faith に命を懸けたのは Desdemona の方であった。

Desdemona の cause 論は4幕3場の「柳のうた」の場面で、Emilia のそれと対比される形で一層明らかにされている。Emilia は 'They are not ever jealous for the cause, / But jealous for they're jealous.' (3.4.154-155) と因果関係を否定するようなパラドクスを弄する

したたかさも見せつつ、Iago の妻に似つかわしい、うがった cause 論を披歴する。「こっちが浮気をするなら、おまえもするがよい」という歌詞に事寄せて、Desdemona が、人妻の不実なんて実際あるものだろうかと尋ねると、Emilia は、女が自分から不実を働くことはなくても、男の愛情が足りなかったり、男が罪の手本を示すからやはりそういうことはするのだ、女の欲望だって男と変わりはしない、と彼女流の因果論を開陳する。Iago が 'wife for wife' (2.1.280) と言ったように、Emilia は 'wrong for wrong' と主張していることになる。これは上の歌の文句と同じで、「目には目を」式の応報論といえる。自分は世界をもらっても不実なことにはできないと Desdemona が言うのに対して、指輪か何かで、というのならともかく、世界をくれるなら別、世界が自分のものであれば、自分の中の悪だからどうにでもできるはず、というのだ。善悪が Desdemona にとって絶対的なものであるのに対して、Emilia に言わせればあくまで相対的なもの。愛情も計算ずくで考えている。

Emilia の応報主義的な因果論は、彼女の今までの際の言葉にも示されているように思われる。夫にせがまれて Desdemona のハンカチを夫に渡していながら知らん顔をしていたために大事に至ったともいえるわけだが、事の次第を知ってそれを皆に打ち明け、そのため夫に刺されて死ぬ時にこう言う。

So come my soul to bliss, as I speak
true;

So speaking as I think, I die, I die.

(5.2.248-249)

小さな罪を犯したが、本当のことを話して死んでゆくのが天国に行けますように、というのは、いかにも Emilia らしい、巧まざる打算といえる。さりげなく Emilia の cause 論になってい

るのだ。

さて元へ戻るが、最前の Emilia の愛の因果論を聞いて 'willow scene' を締めくくる Desdemona のせりふはこうである。

Good night, good night. God me such uses
send,
Not to pick from bad, but by bad mend!
(4. 3. 100-101).

「おやすみ」の繰り返しは、誘引の場で Othello が、'Farewell, farewell' と言って Iago に行ったん引き取らせた時ほどでないにしても、やはり軽いいらだちを示すと解されるが、ここで上のように述べることによって、Desdemona は Emilia の応報主義の cause 論を明確に否定しているように思われる。彼女の考えかたを 'willow song' の文句でいえば、'Let nobody blame him; his scorn I prove——' (II. 49) ということになる。

恨む理由がありながら相手をとがめまいというのは Iago に言わせれば愚の骨頂ということになる。キプロス島の波止場での“女の品定め”でも、Iago は「腹立てて、仕返しできても、そはすまじ。恨みぞ消ゆれ」(2. 1. 149-150) というような立派な女は、つまらないおかみさんになるだけ、というのだが、その賓辞の部分とはかくとして、まさにそういう態度こそ Desdemona の取った態度であった。大詰め場で Desdemona は Othello が自分を殺そうとしていることを知る。「犯した罪を考えろ」と言われて、それはあなたを愛したことだけ、'That death's unnatural that kills for loving.' (I. 42) とパラドクシカルに訴え、殺すのではなく、「追い出す(banish)」ことにしてくれるようにと、Othello の言葉でいえば、「(鷹よろしく) 口笛を合図に解きはなつ」(3. 3. 264) ことにしてくれるようにと、懇願する。しかしそれも空しく、命に劣らず大切である

う操を疑われて、またしても淫売とののしられながら、夫の手にかかる。そして一時的に息を吹き返して、'A guiltless death I die' と Emilia に訴えるが、だれの仕業かと聞かれると

Nobody; I myself. Farewell.
Commend me to my kind lord. O farewell!
(II. 125-126)

と息絶える。Walter C. Foreman の指摘するように、「ゆるしを乞うのに用いる言い方でゆるしを与える」²⁶⁾のである。最も受身的に見えた人間の貫いた愛が、実は最も「与える」愛であることが示される。

Othello は Desdemona の誠に命をかけることを己の cause にしたはずが、裏切られたと信じ込むや今度は、その相手を亡きものにすることを cause としたのであった。やはり愛ずることを cause とした Desdemona は、その相手によっていわれなき恥辱のうちに殺され、それを恨むべき cause を持ったわけだが、いわばこれを放棄する。第二の cause を持たずに最初の cause に殉じたのである。Lear 王が再会した Cordelia に向かって、おまえには当然わしを恨むべきいわれがある、というのに対して娘は、'No cause, no cause.' と応じた。それにも似て、Desdemona による無私の愛、信じきる愛の可能性がそこに見取られている。かたや cause を作り為した者、かたや cause の因果律を断ち切ろうとする者。ここに一つの冴やかな対照が完成する。

最後になったが、Cassio について言及しておく。Desdemona 同様、Cassio も 'Dear general, I never gave you a cause' (5. 2. 296) と弁明するが、こちらは死なずにすむ。またこの 'ladies man' は人を愛し愛される点で、Emilia のように功利的な cause 論を抱かずにすんでいる。そういう意味で Cassio は、この悲劇の中で重要な役割を果たしつつ、本質的には因果性の〈悲劇〉の

らち外にいる幸運な人物として描かれているといえよう。

結 び

我々の cause 論の視点からすれば、結局 Othello の悲劇は 'shaped' causes の悲劇といえよう。Robert B. Heilman は、Othello が自分のアイデンティティに対する不安を常に持っており、'positional assurance' ともいべき安心感を得たいと願っていると言う²⁷。Bayley も Othello が物事をはっきりさせること (decisiveness) を求めるがゆえに 'cause and reason' に拘泥すると考える²⁸。Goldman は、Othello がエキゾティシズムを発散する異邦人でもあり、転向したキリスト教徒でもあることに注目して、そこに自力で身を立ってきた人間 (self-creator) のもろさを読み取る²⁹。そんな Othello が cause 論を述べる時、確信を求めて、自らを神の正義の代行者、裁判官、損なわれた正義を癒すべくいけにえを捧げる神官、戒師、刑執行人という風に自らを擬し、cause を固めてゆくのだ、と観客は感ずる。そしてそこには、神ならぬ人間の因果に対する認識や大義名分論、Bradshaw の言葉を借りると「価値判断の行為」(acts of valuing) に対するシェイクスピアの懐疑³⁰が看取できるように思われる。Hamlet が己の 'cause' に懐疑を持ち、かつそれを行為できずにいた人間の悲劇だとすれば、Othello のそれは、己の cause を作り上げて、性急に——「せめてお祈りの時間だけ」と言う Desdemona に向かって 'It is too late' と言わざるを得ないほど性急に——これを行為してしまふ悲劇といえる。cause を認識し、価値づけをした上で行為するところに、人間としての尊厳と豊かな想像力を感じ取ることができるが、同時にその人間的な誤謬性と作為性ゆえに我々は人間の悲しさ、生の恐ろしさを感じずにはいられない。それは、道徳的不快感を越え

る「懐疑的、形而上学的恐怖」³¹として、我々に提示されているのかもしれない。

注

- 1 Cf. Paul H. D. Kaplan, 'The Earliest Images of Othello,' *Shakespeare Quarterly*, 39 (1988), 171-186.
- 2 'King Lear as a Tragedy of Love,' *Shakespeare Studies (Japan)*, 20 (1984).
- 3 Othello の引用は Norman Sanders, ed., *Othello*, The New Cambridge Shakespeare (Cambridge UP, 1984) によった。
- 4 川田殖・松永雄二訳『形而上学』、『アリストテレス』世界の名著 8 (中央公論社) 所収, pp. 363f. 参照。
- 5 See Alexander Schmidt, ed., *Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary* (1902; rpt. Dover, 1971), s. v. 'cause.'
- 6 当然ながら、批評家によって取捨選択がある。例えば E. A. J. Honigman は Iago の Desdemona に対する恋情を認めず、そのかわり William Empson に倣って、Iago は直接口に出してはいないが、社会階級の劣等意識を持っており、これが彼の 'secret motive' であると強調している。See his *Shakespeare: Seven Tragedies* (Macmillan, 1976), pp. 77-88.
- 7 例えば Helen Gardner, 'The Noble Moor' (1957), rpt. in John Wain, ed., *Shakespeare: 'Othello': A Casebook* (Macmillan, 1971), p. 158.
- 8 See T. S. Eliot, 'Shakespeare and the Stoicism of Seneca,' in *Selected Essays 1917-1932* (Faber, 1932).
- 9 Jane Adamson, 'Othello' as Tragedy: Some Problems of Judgement and Feeling (Cambridge UP, 1980), p. 265. もう 1 例を挙げれば、'supernally calm' (Miola, 次注, p. 59).
- 10 Cf. Robert S. Miola, 'Othello Furens,' *Shakespeare Quarterly*, 41 (1990), 49f.
- 11 拙稿「もし Othello が Desdemona を殺す前に接吻しなかったら」『長野県短期大学紀要』44号 (1989) 参照。
- 12 H. H. Furness, ed. *Othello: A New Variorum Edition of Shakespeare* (1886; rpt. Dover, 1963), p. 293.
- 13 Winifred M. T. Nowottny, 'Justice and Love in Othello' (1952), rpt. in L. F. Dean ed., *A Case-*

- book on 'Othello,' pp.180-184.
- 14 John Money, 'Othello's "It is the cause...": An Analysis,' *Shakespeare Survey*, 6 (1953), 94-105.
- 15 William Empson, *Seven Types of Ambiguity* (1930; rpt. Penguin Books, 1977), p. 219.
- 16 R. S. White, *Innocent Victims: Poetic Injustice in Shakespearean Tragedy* (Athlone, 1986), p. 86.
- 17 See John Bayley, *The Characters of Love: A Study in the Literature of Personality* (Chatto and Windus, 1960), esp. pp. 198-201.
- 18 Bernard McElroy, *Shakespeare's Mature Tragedies* (Princeton UP, 1973), p. 137.
- 19 Michael Goldman, *Acting and Action in Shakespearean Tragedy* (Princeton UP, 1985), pp. 46f. ただし Goldman の場合, どの辺で Iago を信じて cause となるかということに力点があって, 筆者とは意味がやや異なる。
- 20 エトムント・フッサール『イデーンI-I』渡辺二郎訳 (みすず書房, 1979), p. 238.
- 21 Graham Bradshaw, *Shakespeare's Scepticism* (Harvester, 1987), p. 17.
- 22 Curtis Brown Watson, *Shakespeare and the Renaissance Concept of Honour* (1960; rpt. Greenwood, 1976), esp. pp. 159-162, 443-447, and John W. Draper. *The 'Othello' of Shakespeare's Audience* (1952; rpt. Octagon, 1978), esp. pp. 146-151.
- 23 Cf. Watson, p. 160.
- 24 Norman Sanders, p. 192.
- 25 拙稿「もしOthelloが...」参照。
- 26 Walter C. Foreman, Jr, *The Music of the Close: The Final Scenes of Shakespeare's Tragedies* (UP of Kentucky, 1978), p. 169.
- 27 Robert B. Heilman, *Magic in the Web: Action and Language in Othello* (1956, U of Kentucky P), pp. 138f.
- 28 Bayley, pp. 168f.
- 29 Goldman, pp. 62f.
- 30 Bradshaw, p. 22.
- 31 Ibid., p. 21.